

竹藪と僧院のバハン町

山形洋一

バハン町は下町に近いにもかかわらず、人口密度が平方キロメートル当たり 1 万人を切り、屋敷町ダゴンに次いで低い。「富裕層の住む地区」とウィキペディアにあるように、ここもまた敷地面積を誇る屋敷町なのだ。

バゴ山脈南端の「イラワジ層」丘陵に位置するため、その景観は海岸台地に直行道路を引いたダゴン町のようにではなく、起伏に富む。坂が多く、道は左右にうねり、袋小路も珍しくない。緑と高い塀と鉄条網に囲まれた「隠れ屋敷町」とでも言おうか。

ヤンゴンの下町が整備された 19 世紀半ば、その飲料水をカンドー湖に頼っていた時期があり、現在のバハン町はその水源涵養地区として、また行楽地として温存されたい。町らしくない町並みはそのところからの遺産だろう。湖面の大半もバハン町に属する。

この複雑な町並みを把握するのに、中ほどを東西に走るシュエゴンダイン通りを X 軸にするとわかりやすい。カーブが多いので「X 軸」とはまことに大雑把な譬えだが、東西街道の少ないヤンゴンでは重宝され、市内に約 300 あるバス路線のうち、約 50 本がここを通る。

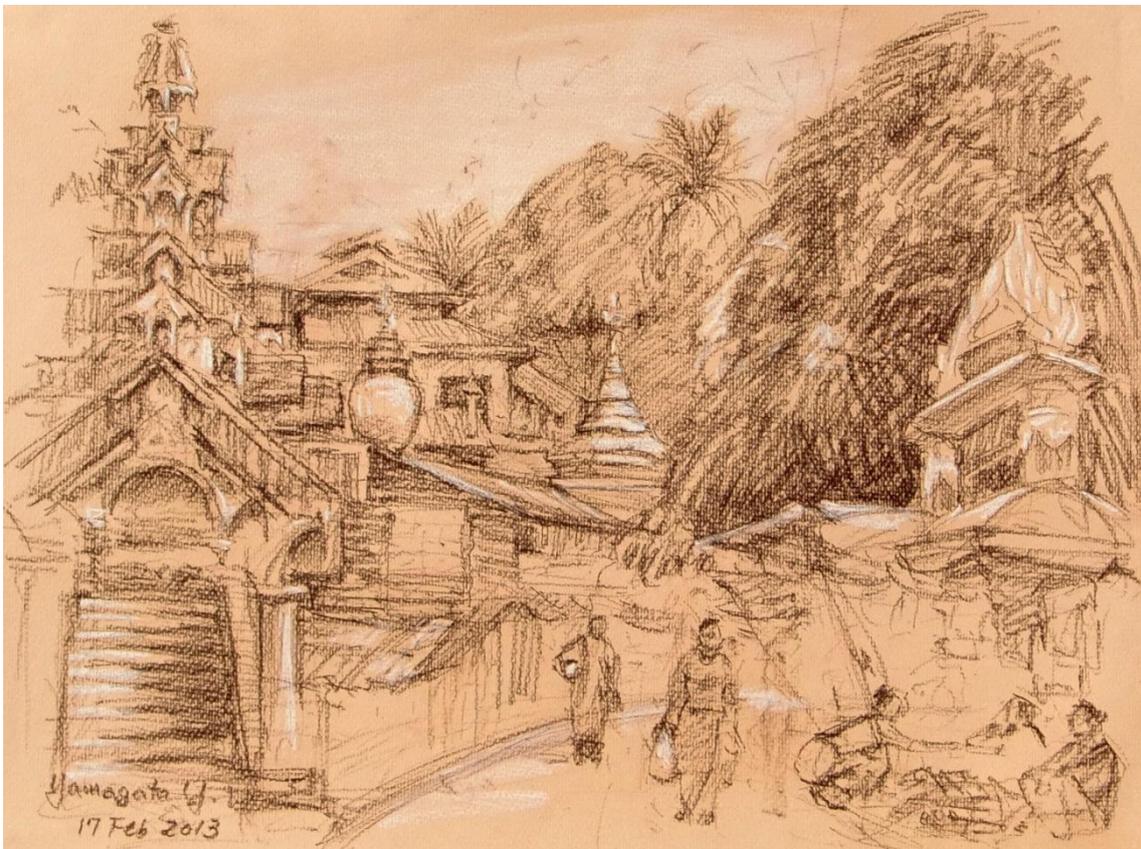
X 軸の真ん中あたりに、ンガータッジーとチャウタッジーの二大寺院がある。名前の由来は寺の破風の重なり具合によるのだと、ものの本には書いてあるが、何を数えて「5」だの「6」だのと呼んだのか、私には見えない。

チャウタッジー（六層大寺）は弁柄色の大きな屋根で覆われ、工場か倉庫のように見える。その屋根の下に涅槃仏、いわゆる「寝釈迦」の像がある。曲げた鉄筋の長い睫と濃いアイシャドーに、三輪明宏を連想する人が多い。足の裏の 108 図像の案内板があり、ヒンザー・ミン（鷲王）を確かめることができる。高台にあって風通しも良く、大型観光バスを止める駐車場や、有料トイレもあり、散歩途中の休憩にはもってこいの場所だ。



道を挟んで南の丘に聳えるのがンガータッジー（五層大寺）。参道を上がりきると、白色の大仏坐像がある。顎が張り意志の強そうな顔立ちは、日本の如来や菩薩に比べて現世的な、どちらかと言えば四天王や十二神将向けの武張った相をしている（図1）。「白目」は青みを帯び、唇と耳の穴と爪はピンク。金の王冠をかぶり、鎧のようなものをまとっている。外国人拝観料 2 ドルが安いかわいか、意見が分かれるところだが、模写をしてみると目や口元の微妙なカーブがなかなか難しく、これを作った仏師も決して凡庸ではなかったとわかる。

寺の西出口を出て、南西に下る尾根道の途中には、コンクリートやタイルで囲った墓が並んでいる。階段を下りきった門の上に、なかなか魅力的な木造の祠堂がある。四方に突き出た三段の切妻破風が、それぞれ 2 ないし 3 層重なっている。それらを支える幅の狭いアーチの左右には、アーチの片割れが半分ずつ付く。木造ならではの繊細な工夫が楽しく、唐草模様の木の透かし彫りも、白地に薄緑の色彩も品がよい。建立は 1953 年とあり、このあたりでは古い部類だろう。位置的には日本大使館の北 600 メートルほどのところにあたる（図2）。



門前の道は谷筋に沿って湾曲し、朝のうちは路上に市が立つ。近くにはヤンゴン市内で最小規模の公設市場、20 店舗ばかりの「ボージョー・マーケット」もある。すぐ近くにアウンサン将軍一家が住んでいたことからこの名があるのだろう。市内最大の土産物市場と

紛らわしい名前だが、あちらは旧名スコット・マーケットで、むしろこのちっぽけな市場が元祖かもしれない。竹藪の奥に朽ちかけたような僧院が点在する隔世感を利用して、瞑想道場がいくつかあり、頭を丸めた外国人の姿もたまに見かける。

アウンサン將軍の住居跡は、ボージョー・アウンサン博物館として保存されている。ベランダのアーチや、塔の上のスレート葺きの屋根など、基本的には洋館だが、東洋趣味も見られる。瓦屋根の正面が薄く、ふちが濃く見える効果は、胃の X 線造影や女性の網タイツと同じ原理である。かの將軍がこんな質素でしかも瀟洒な家に住んでいたとは、ちょっと驚きだ。

バハン町には中国系の寺や修道院も比較的多い。カバーエイ通りで目立つのが、大学通りの交差点近くにあるフーシェンシー（福山寺）。その南にあるのは、ゴムで財を成したリン・チンツォンの邸宅で、現在美術学校となっている。

シュエゴンダイヌ通りの西、日本料理屋「ふるさと」の向かいに観音山達本禅寺があり、塀に「阿弥陀仏・観世音菩薩」と書いてある。原色を用いた中国風のコテコテ装飾や、明るい音階の読経には多少違和感を覚えるが、木魚のリズムで小僧さんたちが勤行ごんぎょうをする姿が、日本昔話のようで微笑ましい。

壁には円を四つ割りした因果関係図の漢訳版が描かれている。過去の因縁で現状があり、現在の功德で未来がきまる、という原理だ。

ここから南西に行くと、慈雲仏学院と書かれた尼僧院がある。臨済宗の寺で、本山は中国雲南省大理の鷄足山にあるそうだ。三尊あるうち中央の本尊は釈迦如来、向かって右に消災延寿薬師如来、左に阿弥陀如来と筆談で説明を受けた。先祖の法要げんぜりやくと、現世利益ごしやうと、後生（来世）のすべてをまとめてお願いできる（図 3）。



この尼僧院からシュエダゴン大塔の東参道の角にあるバハン公設市場にかけて、丘の裾を取り巻くように仏具屋が並んでいる。太鼓のような皮革製品は、心なしか遠慮した場所に店を構えている。

斜面には僧院がいくつかへばりつき、その間の細い坂道を上ると、シュエダゴン・パゴダの北東の丘にたどり着く。このあたりは英緬戦争の激戦地で、突貫する英軍を迎え撃ったビルマ軍が、血塗られた刀を洗ったと伝えられる池が丘の上にあり、セメント像が立っている。

そのわきに立つのは、アウンサン将軍以下「殉教英雄」の廟。すぐ東にはチャイティョーの別院があり、周囲に等身大のナツ立像が並んでいる。院内には、12世紀日本の「九相図」絵巻を思わせるような、死体が腐乱して白骨になるまでの過程を示す原色の光景が掛けられている。新旧さまざまな霊が彷徨^{さまよ}っていきそうで、犬の目つきも何やら薄気味悪い。

シュエダゴン・パゴダの近くに来たついでに、東参道のすぐ南（塔に向かって左）にある坂道を上ってみよう。道の左は僧院の壁と古本屋が、右には下水をまたいで飯屋と万屋がある。下水の上に何本も走る水色の上水パイプが、この地区の生活程度を示し、燦然たる金色大塔の陰を見る感じだが、坂を上り下りする人たちに緊張した様子は見られず、犬が寝そべっていれば、猫も表に出てくる。



坂を上がりきる手前、左の塀の隙間から、ちょっとしゃれた建物が見える。門の表記によればカレン族仏教徒のための図書館（経蔵）らしい。モルタルの洋館だが、八角の塔の屋根の庇や壁の浮き彫りが東洋風で、しかも装飾過多に陥らず、ヨーロッパ的(?) 気品を保っている。

ひとつ不満を言うなら、丸瓦葺きのように見せかけた八角塔の屋根が、裾拡がりのブリキ板を8枚寄せたに過ぎないことだ。半円の切り込みをつけて反り返らせただけなので、アウンサン将軍旧宅で見るような輪郭の強調が見られない(図4)。

シュエダゴン・パゴダの南の裾には、最後のビルマ王ティボーの妃の廟や、国連事務総長ウ・タン（日本ではウタントと呼びならわしてきた）の廟があり、す

こし先のダゴン町に入ったところには、ムガル帝国最後の皇帝の廟もある。ヤンゴン市役所（YCDC）の地図帳にはどういうわけかこれらの記載がない。

バハン町は浮世離れした町である。昼間出会うのは、廃品や飲料水の瓶を回収する手押し車くらい。思いもかけぬところに画廊や高級美容院がある。商店は少ないが、ちょっと鼻を利かせて歩けば、窪地の密集集落に行き当たり、朝のうちなら路上市場のにぎわいや、僧俗ならんでソバをすする姿などに出くわす。

距離感は違うが、京の都に対する嵯峨といった、ちょっと通向きの散歩コースだ。道が曲がりくねって見通しが利かず、地図に載っていない袋小路もあちこちにある。

迷うことが好きな人にお勧めしたい。